松山幸生先生講述

全32回ー29

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

2023年12月

1996年1月から1998年10月

写者　小原靖夫

## 第29回

## 神の言葉を伝えた人を思い起こしなさい

### 第13章⑦節から⑲節

### 神に喜ばれる奉仕

⑦あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。
　彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。
⑧イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。
⑨いろいろ異なった教えに迷わされてはなりません。
　食べ物ではなく、恵みによって心が強められるのはよいことです。
　食物の規定に従って生活した者は、益を受けませんでした。
⑩わたしたちには一つの祭壇があります。
　幕屋に仕えている人たちは、それから食べ物を取って食べる権利がありません。
⑪なぜなら、罪を贖うための動物の血は、大祭司によって聖所に運び入れられますが、
　その体は宿営の外で焼かれるからです。
⑫それで、イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、
　門の外で苦難に遭われたのです。
⑬だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、
　宿営の外に出て、そのみもとに赴こうではありませんか。
⑭わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、
　来るべき都を探し求めているのです。
⑮だから、イエスを通して賛美のいけにえ、
　すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。
⑯善い行いと施しとを忘れないでください。
　このようないけにえこそ、神はお喜びになるのです。
⑰指導者たちの言うことを聞き入れ、服従しなさい。
　この人たちは、神に申し述べる者として、あなたがたの魂のために心を配っています。
　彼らを嘆かせず、喜んでそうするようにさせなさい。
　そうでないと、あなたがたに益となりません。
⑱わたしたちのために祈ってください。

**　わたしたちは、明らかな良心を持っていると確信しており、**
**　すべてのことにおいて、立派にふるまいたいと思っています。**
**⑲特にお願いします。**
**　どうか、わたしがあなたがたのところへ早く帰れるように、祈ってください。**

今日は⑦節から後のところを学んでゆきたいと思います。この部分では私たちが色々な形で聞き慣れている御言とか大切に思っている言葉が沢山出てまいります。例えば⑧節の**「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」**という信仰の告白は、初代教会から今日に至るまで教会が受け継いで来た大切な「信仰の告白」であるわけです。そういう短い言葉の中に教会の継承しなければならない信仰箇条が、非常にきっちり詰まった形で書かれている箇所です。

第⑦節
**あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。**
**彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。**

**彼らのために御言を取り次ぎ、教会を牧会して来た先達たちのことを考えてご覧なさいと言っていますが、この「指導者たち」という言葉は「支配者」という意味をも含む言葉（ヘーゴウメノーン、原型はヘーゲモーン）です。そして、この指導者たちがあなたがたに対して「何を語ったのか」、そのことを先ずし**っかりと捉えて見なさいと言っているのです。

「神の言葉を語**るべき」教会に、召された牧会者として、しなければならない大切な仕事は、その御言を正しく語ること、その御言を正しく教えること、それを宣べ伝えることです。そして、それを行ってきた先達があなたがたに語ってくれた言葉を、今一度しっかりと思い起こしなさいと、ここでは勧めています。**

**それは、彼ら指導者の言葉そのものでなく、「指導者によってもたらされた『福音』を先ずしっかりと思い起こしなさい」と勧めているのです。次に「彼らの生涯の終わりをしっかり見て」とあります。この「生涯の終わり」という言葉については、色々な解釈がな**されています。

一つは、彼らが**遺した善き神の御業、そして、それに相応しい生活そのものを模範として注目しなさい、という意味を持っていると考えられます。しかしそれ以上に、彼らの生涯を通して歩んで来た過程で、神によって示され、与えられた多くの感化を、今一度、思い返してご覧なさい、と言っているのだと思います。**

ですから、ここで彼の言う「終わり」が、むしろ「彼らの死にざま」そのもので**あって、**「どう死ぬかということを、しっかり心のうちに見て、受け止めて、そのように生きて行きなさい」と勧めているのです。

聖書の中で色々な形で私たちは「命」という問題に向き合うわけですが、「いかに死ぬか」ということは、聖書の中では「どう生きるか」ということに直結するのです。

例えば、詩人にしても他の預言者たちにしても「たとえ世のすべての人々が私たちに逆らったとしても、私は主を選びます。すべての人々が私を晒し者にしようとも、私は主の御言を恥じません」というような表現で、御言に生きる者の幸いを謳っています。

御言に生きるということは、この地上でどう扱われようと、神の御前に生きる喜びを生き抜くことの幸いを、非常に力強く謳い続けてゆくことで、そうした言葉が旧約の中には沢山見出されるのです。無論、これはヘブライ人に宛てた手紙ですから、そういう意味では「旧約の詩人たちの謳った歌、人間の歩みについて書かれている歌、それらをしっかりと思い返しながら、そのように生きた先達が具体的に目の前にいたのだから、あなたがたも、それを神の御恵み、支えとして歩めるはずだと、しっかり捉えておきなさい」と語られている言葉だと思います。

「あなたがたに神の御言を語った指導者たちのことを、思い出しなさい」と書かれているのは「あなたがたに御言の奉仕をしてくださった方々のことを、夢々忘れてはいけませんよ」という裏打ちが為されているのです。ところが、そうした大きな働きを為してくださった指導者が亡くなってしまった後では「あなたがたは今、彼らが与えてくれた信仰を生きていますか？」という別な意味での問いかけが、始まっていると思います。つまり、彼らが唱えた思想を生きるとか、理論を生きるとか、神学を生きるということはできていても、改めて「主の御恵みを、彼らと共に生きていますか？」と問われているわけです。

信仰はともすると形骸化します。「礼拝を守っています、聖書を読んでいます、お祈りをしています、聖書のこの御言を大事だと考えそのように生きています」というように。その場合、すべての関心は「自分」に向いているのです。「私」がどうするのか、「私」がどう感ずるのか、それらが最大の関心事になるのです。[262]

ところが福音は、『私』が問題ではなく、「私が隣人に対してどう関わるか」が問題になっており、更には「神に対してどう関わらせて頂くか」が問題になるのであって、「私ということに収斂させる生き方をしてはいけません」という意味が含まれているのです。

これは、今日の教会にとっても大切な問題だと思います。教会が教会であろうと必死になって、自分たちを質して生きようとする時、先ず、様々なものを切り捨て、排除していこうとします。言い換えれば、和解の福音の立ち上げが、むしろ「他者を疎外し、排除すること」に繋がりかねません。

これが更に進めば「選民意識に生きる孤高の信仰」に変わっていってしまう。ユダヤ教がもっている一番大きな問題はそこなのです。神の御前に忠実であろうとする熱心さが高じて、「自分たちは神の御前に何をしてはいけないか、どういう人々と関わってはいけない

か」ということで、自分たちの正しさを保とうとしたわけですから、ユダヤ教は大変偏狭な宗教になってゆきました。自分たちを防衛するアイデンティティを守り保つためだけの宗教に変わっていってしまったのです。

それに対して、「あなたは元々神に愛されて創られているのだから、そのことに感謝して生きて行けば良いのであって、自分で自分を守る必要はない、神がいつも守っていてくださっているのだから」と、そのことを知らない人々に「神様があなたを守っていますよ」と伝えるのが教会の務めであり、神に召された者の務めなのです。「あなたがたは、その一事を使命として為し続けていますか？」と、主からここで厳しく問われているのです。

第⑧節
**イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。**

「イエス・キリスト御自身とあなたがたとの関わりは？」ということがここに出て来るわけですが、イエス・キリストは「これで終わり、もう完成した、という『時』をお持ちにならない御方」なのですと、この言葉は、ひとつには、そういう意味を含んでいます。

イエス・キリストはすでに十字架の上で贖いを全うされておられますが、だから、それですべて終わり、That's all right！ではないのです。きのうもそうなさったように今日もまた、そして、これから終わりの時が臨む時にも、イエス・キリストは私たちのために執り成しを続けてくださる御方なのだと言うのです。

つまり、そこには「イエス・キリストの十字架の贖いは、形の上で、理屈の上で完成したと言われているけれども、この世界の中では、どう見ても到底完成したとは受け止められない現実が私たちの周りを包んでいるではないか、そしてそれは、どんなに努力してみても、どんなに一所懸命励んでも、乗り越えられないような大きな壁となって私たちの前に横たわっているではないか」という主張があるのです。

イエスはそのことを先刻ご承知の上で、きのうも今日も明日も変わり給うことなく執り成しを為され、赦し続けられ、愛し続けていてくださいます。「信仰は、きのうも今日も将来も『永久に日々フレッシュな形で』イエス・キリストとお出会いし、向かい合うことによってしか、意味を持たないものですよ」と語られているのです。[264]

しかしながら、この言葉を私たちは自分に都合良く捉えてしまい、「イエスは変わらないなら、何しようと許されるのだ」と思ってしまいがちです。だが、そうではない。「イエスは変わり給うことがないからこそ、あなたがたの心の些細な裏切りもすべてご存じであられる。イエスを再び十字架に磔るがごとく、主の御愛をないがしろにするような生活を送っていることも、百も承知していらっしゃる。でも、それにも拘らず、イエスは、あなたがたを心から愛しておられるのだ」という神の御愛の完全さを、もうひとつには、述べているのだと考えられます。

第⑨節前半、
**いろいろ異なった教えに迷わされてはなりません。**

先ず「いろいろ異なった教え」、これは当時の社会に、教会生活をしていながらも、**キリストの福音に留まり続けられない、大雑把に見れば二つのグループがあったと考えらます。**
**一つは、ローマの政府によって手厚い保護を受けていたユダヤ教、その枠の中端に身を寄せることによって政府からの保障を得、身の安全を確保する生き方を始めたユダヤ人キリスト者がいました。言い換えると「ユダヤ教を身の安全のための隠れ蓑にしていたキリスト者**がいた」ということです。

もう一つは、それとは全く違う形で自分たちを擁護するために、排他的、**或いは閉鎖的な独自のクリスチャンの集まりを形成して、「福音を提唱するあの人たちとは一線を画しているから、私たちは正しく、危険な者ではないと自己義認をしていこうとする群れがあった」のです。**

そういう二つの群れに対して、そのような物の考え方や教えは、**もはや「異端」であると捉えられ、**「神を神として信じられず、御言に聞き従えなくなっている人々、それでいながら、信仰者だとうそぶいている人々**であり、そういう人たちの考えに振り回されてはなりません」と警告していると考えられます。**

私たちは、生き**てゆくイコール生活する**という現実が、**とも**すると、神から離れたところで展開されていく、と認識されるという**こと**が非常に多いですね。
言い換えれば、信仰を持つこと**と**、現実に私たちが食べたり飲んだり休んだり**する中に**幸せを感じ**る**こととは「次元の違う問題なんだよ、信仰と**生活**の問題とは別なんだよ、**両面あるんだよ。**」という発想があるのです。

ですが、そういう発想をする人々が拠り所にしているのも**「イエスが語られた御言」なのです。「『カイザルのものはカイザルに、神のものは神に』とイエスだって認められているんだから、生活に信仰なんて重ねちゃあ駄目なんだよ、生活は経済の問題として考えなければならないんだよ」と、ある程度尤もらしく、しかも聖書の言葉で裏打ちされた形で語って来られると、何となくその言葉に対して反論できなくなる。いやむしろ、そういう考えをした方が理に適っているようだと納得し、そういう方向に流されていってしまう傾向があるのです。それに対して・・**

第⑨節後半、
**食べ物ではなく、恵みによって心が強められるのはよいことです。**

この言葉は、日常生活で私たちが衣食住における満足を求めるよりも、むしろ「神から賜る本当の御恵み、神がすべてを備えていてくださっているという真実によって、平安を与えられることが極めて大切です」と読むことができます。

「恵みによって心が強められる」という言葉がありますが、この「恵み；カリス」という言葉は新約聖書の中に全部で130回使われています。そのうち、半数に近い62回がパウロ書簡（７つの真筆書簡）の中で使われています。（但し、その数は「カリス」という原典の単語を数えたのではなく、新共同訳聖書の中で「恵み」とある単語を数えた数です。）

「恵みによって、恵みによって・・」とパウロは盛んに述べています。そしてパウロは、この「恵み」という言葉を「恵みの恩寵」とか「恵みによる福音」とか、あるいは「恵みによる救い」という言葉として使っているのです。[267]
このパウロが言う「恵み」とは、細かい生活上の事柄ではないのです。食べ物が豊かに与えられたとか、病気が治ったとか、そういうことがパウロのいう「恵み」ではないのです。そして、彼が「恵み」という言葉を使う時は必ず、「神によって罪が赦されていることが恵みなのだということを踏まえて用いられている」のです。

自分たちから求めたのでなく、求めもせずに与えられたもの。しかもそのことによって私たちが生き強められ、望みを持てるようにと、私たちが意識せず、意図せず、要求もしないのに上より与えられたもの。それが「カリスと言われている、神の恵み」なのです。

しかしながら、その恵みの対象者が真に求めていたものは、もしかすると、満腹することや、すべての人たちの上に立ち、頭になることだったかもしれないですね。でも、神はそんなことは全部度外視なさって「救われることが恵みなのだ」と教えてくださるのです

言い換えれば、「神の御恵みの中に生きることが許される、神の憐れみの対象として覚えられる、それが、恵みです」。もっとつっこんで言えば、**「それが、人生を生きる者にとって最大の到達課題なのです」**と、ここでは語っているのです。[268]

信仰は、迫害が起こりそうな現実の中では、とかく防衛的になります。「いったいどうしたら、重たい信仰を背負って、この困難の中を生き抜いてゆけるだろうか・・」というような格好で信仰を捉えがちになるのです。が、この著者は「そんな自己防衛的なことで生きることは、信仰ではない。信仰とは、神があなたをどんな時にも救い、意味ある者し、豊かに用いてくださるということだ」と語るのです。

「礼拝；ワーシップ」とは、神の御前に自らを献げてゆくことで、本来、奉仕；サービスなのです。ですから、神への礼拝を本当に捧げられるかどうかは「私は、この歴史の中の自分の人生において、どんな状況下にあろうとも、**自分が生きる価値と意味を、神から与えられていると信じられるかどうか」**に懸かっているのです。ですが、私たちは、そういう極めて究極的な状態に自らを立たしめて、礼拝を考えてみることが少ないようです。

それにひきかえ、この手紙の著者を含め、初代教会の指導者たちは殆ど「主は近い」ということを自分たちの最優先課題の宣教メッセージにしていました。明日裁きが来るかもしれない、世の終わりがもうそこまで来ているのだ、ということをいつも真剣に考え、捉え、「その時をどう生きるか、その時はどのように神によって評価されるのか」と。そして、それらのメッセージは、それ以外の一切を切り捨て、捨て去っても構わないというほどの問題なのだということを、いつも覚えて生きていなければいけない、と宣べ続けていったわけです。（人間にはただ一度死ぬこと、その後に裁きを受けることが定まっている。9章㉗節にあります。現代は裁きが忘れられているとしか言いようがない状況です。写者記）

ここでも、今は小康状態にあり、大迫害が起ころうとする直前の中休みのような時代で、しかも、ある意味では、たがが緩んでしまって、自分自身のことだけが非常に気になるような時代の中にいる人々に向かって、この著者は、この手紙の中で警告するのです。「主がお出でになった時に、その再臨を手放しで喜べる状態で生きているかどうかが大事な問題ですよ」と。今まで自分の肉体を生かしてきた食物のことは、主の御前に立った時には、もはや何の意味も無くなるわけですから。

第⑨節後半の続き、
食物の規定に従って生活した者は、益を受けませんでした。

別な言い方をすれば「神から与えられる御言によって強められる」そのことが最善なのです。かつて旧約の時代から今日に至るまで食物についての諸規定が沢山与えられましたが、それを一生懸命守った人々は、そのことによっては救われませんでした。
食物が救うのではないのです。「でしたら、神御自身に目を向けて、その恵みを喜んで受け止め続けることの方が、どんなに幸せか分かるでしょう」ということを語るのです。

私は、今日の教会に対しても、同じようにこの言葉は告げられていると思います。
「自分たちが正当であるとか、信仰的に優れているとか、伝統的に正しいとか幾ら言ってみても、そんなものはあなたがたを救いませんよ。あなたがたを救うのは、イエス・キリストの贖いの血潮以外には無いのです、神の恵み以外には無いのです。恵みに縋(すが)らなければ救われないということは、自分でそれ以外のどんなものを一所懸命追い求めても、それは不完全だから、神の救いとイコールにはなり得ないものなんですよ。」と。

そういう点で、私は徒に神学を軽視したり、教会の伝統は意味がないと言うつもりはありません。ですが、それを信仰の豊かさとして中心に据え、それに価値があり、それに意味があると考え始めた時に、教会は堕落を始めるのです。十字架の恵み以外に救うものが出て来ますから、神の方を向かなくなります。
　例えば、かつてのカトリックの教会がそうでした。「天国から預かったペテロの鍵」を自分たちが伝承していると懸命に主張し続けたために、結局は神の恵みから視点が逸れて、その鍵をどうやって守り通しているかを証明してゆくことに収斂してしまった。それ

で神の救いという本来の福音宣教からは遠く離れた。言うなれば、教会の負の歴史が刻まれてしまったのです。

そのようなことを考えますと、「私たちの教会の中にも、そのような、時には神の恵み以外に救いがあるかのような過ちを冒したことがなかったかが、問われている」と著者は襟を正させるのです。271

第⑩節前半、
わたしたちには一つの祭壇があります。

つまり「私たちが礼拝すべきは、唯お一人の神です、その神の御前に献げるいけにえも、唯一つ、御子キリストの御血潮です。」ということを語っています。
ここから先、著者は、少し極端な表現で「内と外」ということを強調し始めます。もっと別な言い方をすれば、「あなたがたは今どこに立っていますか？　今どこにいますか？」ということを大変厳しい口調で問うて来るのです。「もしも、あなたがたが幕屋の内だけにいる、言い換えれば、神の選民であり、律法遵守により神の義を得ている、という確信の中に生きている、ならば、このイエスの十字架刑による贖いは、あなたがたにとっては意味がありません。そこからあなたがたは何の恵みも頂くことはできません。」と訴えるのです。（この短い言葉からこのような深い意味を見出されるのが牧者なのだと教えられます。）

第⑩節後半、
幕屋に仕えている人たちは、それから食べ物を取って食べる権利がありません。

旧約の伝統に従って言えば、そのようになります。それを説明するのにレビ記16－17章や22章等を参照します。自分たちの贖罪のために全焼のいけにえを献げる場合は、まず、犠牲動物を野外等で屠り、それを臨在の幕屋の入り口の祭司のもとに携えて行きます。祭司はその血を臨在の幕屋の入り口にある主の祭壇に注ぎかけ、かつ、その脂肪を、主を宥める香りとして祭壇で燃やしてすべて煙にします。そして、儀式で残った皮、肉及び胃の中身は、宿営の外に運び出して焼きます。それらは自分たちの食物とはなりますが、「聖なる献げ物」とは見做されないため、祭司にはそれを食べる権利がありません。それが法でした。（預言者サムエルの師、エリの二人の祭司なる息子たちは、儀式の度にその法を冒したために、主に裁かれて、死にました。）

第⑪節、
なぜなら、罪を贖うための動物の血は、大祭司によって聖所に運び入れられますが、
その体は宿営の外で焼かれるからです。

宿営の外というのは「神殿の内側のいわゆる聖なる場所ではない『その外側』であり、彼らの言葉で言うならば、辺境の地、神の言葉が支配する地ではない外側の地、異邦の、或いは罪人の地、穢れた者の地」である。そこで贖いのための犠牲の残りは焼かれました。

第⑫節
**それで、イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです。**

「エルサレムの街の外」に**処刑地ゴルゴタの丘があり、様々な門外漢と言うべき人々がそこに置かれていました。そういう「門の外」で、イエスは十字架にお架かりになったということです。それを踏まえて、**イエスの贖いとかイエスの救いを本気になって考え、その救いに**与ろうとするならば、「門の外」に出ない限り、その救い、その恵みには関われないと言っています。それを裏返せば「勝手な自己義認の中には、赦しも贖いもありません」となり、大変厳**しい、と言うか、鋭い著者の言葉だと思います。

「**あなた**たちのいる場所はどこですか？」という問いかけに対して、よく「私たちは神の救いの中にいます」と答えるのですが、「どこでその救いに**与**っていますか？」と問われる場合も、自分自身の身の保全を考えて、**問題や支障の少ない**「街の中で、門の中で」**と答えます。**もっと**言えば、**「教会の中で救いに与っているのです、仲間と一緒に与っているのです。」という言い方をすることが多いのです。
**これを聞いて、**この著者は**なんと、**「その中には救いはない、教会の外に救いがあるのだ。」と**訴える**のです。ですが、**これを裏返せば「教会以外に救いはないという教理に抵触する」ことになるのではないでしょうか!?**

**しかし！⑫節の主張を真直ぐに捉えれば、**「救いをこの世にもたらすのは、教会の力ではなく、**教会の外のゴルゴタの丘で御自ら十字架に磔になられた、イエス・キリストという御方のはかりしれない偉大な御愛の力によるのです。このイエス・キリストの御許**に人々を導くのが教会であり、**いわば、街の外、門の外**に人々を引きずり出し、**そうした穢れた地で、自分たちの極みの罪のために呪いの十字架に架かられた主イエス・キリストを、しかと、とくと、心に焼き付けることが、**教会の仕事なのです。」**と、**いうことになるのです。

**十字架をシンボルとする教会の中で安穏とし、もう**私は**救われ、**もう**私は**安心だと思っている多くの人々に、そうではないということをはっきり知ら**しめ、神の**救いを**本当に**求めるならば「**あなたも、あの十字架のイエス・キリストの御許まで深く下って行って、縋り、額ずかなければ、**駄目なのだ」と告げ知らせる**ことこそ**が、教会の本来の務めなのだと言**える**と思います。

第⑬節
**だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、**
**そのみもとに赴こうではありませんか。**
預言者はしばしば「荒野に帰れ」ということを語りましたが、この手紙の著者は、「イエス・キリストが十字架に付けられたのはエルサレムの街の中ではなかった、街の外だった。だからあなたがたも、世界の人々を贖ってくださる神の御恵みを人々に宣べ伝えよう

とするならば、自分の義を追求することを止めて、自分自身をかなぐり捨て**なければならない。そうして、罪人の世界、異端の世界、異邦人と呼ばれる人々の世界、そういう世界に自分自身の身を晒しながら、そこに打ち立**てられている**十字架上のイエス・キリスト**を指し示さなければならない。」という意味を込めているのです。275

「だから、わたしたちは、街の外に出て行こうではありませんか。門の外に出ようではありませんか、宿営の外に打って出ようではありませんか。」
伝道とか宣教とかという言葉は、正にそういう意味内容をしっかり**孕んでいる言葉です。**

今、私はこの箇所を読みながら「ノアの箱舟」のことを考えます。神が神の御言に従う者をお救いになるために、箱舟を用意なさる、ノアは、人々から**馬鹿にされながらも箱舟を造った。神の御言に従って、よく晴れているにも拘らず、動物を携えてきて箱舟の中に運び込み、自分たちも箱舟の中に入って、神の命令に従って戸を閉じた。**

全く馬鹿げたことです。常識から考えたら**可笑**しなことなのです。でも彼は、唯、神の御言ゆえにそれを為し遂げたのです。その時、箱舟は彼の命を救うもの**と成**ったのです。
それから長い長い嵐の時、大雨の時が終わって、箱舟がアララト山の上に着いた。彼らはそれでも箱舟の中に留まり続けた**の**かと言うと、そうではないですね。そこで、**神に**箱を開けて**頂いて、すべてのものを「箱の外に」導き出す。そして「箱舟の外で」神に礼拝を献げた。自分たちを救ってくれた器なる箱舟が大事なのではなく、その器を用いて救ってくださった神のために祭壇を築き、焼き尽くすいけにえを献げて、ノアは礼拝を成したのです。**276

多くの場合、箱**舟を神にしてしまいます。私**たちを救ってくれた、これは大事**なもの**だ、これは素晴らしいと、それを**有難がって**拝みます。それはイエスを主とする信仰ではないのだ、ヤーウェを神と信ずる信仰ではないのだと、先ずここではっきりと覚えておくことが大切です。

「街の外に出る、宿営の外に出る、箱舟から外に出る、そこで、神と出会う。多くの人がそこにはいた、逆らう人もいた、神の声を聞かない人々もいただろう、しかし私たちはそこで神の**御声を聴いて生きてい**こうとしているのです。」そういう、ある意味では非常に伝道的なメッセージが、ここには書かれています。

ところが、伝道的なメッセージが書かれている宛て先の教会、その教会はどうだったかというと、伝道的な働きをすることによって、**反って取り締まられたり投獄されたりすることを恐れていたのです。彼らに対す**る為政者の理解がなかったのです。信仰をもっている宗教的指導者も、そういう人々に対しては全く無力でしかなかったのです。だから彼らが打って出ることは自分自身が捕縛されるかもしれない、極めて身の危険があったのです。

「でも、そこにしか救いはないのですから、打って出ようではないか」とこの手紙は書いています。　**（松山幸生先生は静かに自ら打って出られた、数少ない方でした。国会に座り込み祈られました。）**

これは、やはり私たちがいつでも考えておかなければならない問題だと思います。
太平洋戦争の時に、教会は大変大きな過ちを**冒しました。それは、正にそういう危険の中で尚、福音だけを携えて打って出ることを、ある意味とても躊躇した。そんなことをやったら根こそぎ教会が無くなるのではないか、そのために私たちは福音を少しでも継承していけるように耐え忍んで、安全な箱舟に留まり**続ける方が大事ではないか、と考えてしまったところから、大きな間違いが始まったわけです。

教会を建てたのは私たちではないし、私たちの努力ではありません。神の御霊が働いてお**造りくださったのですから、私たちが根こそぎいなくなっても、教会は在るのです、神の御霊は在るのですから。しかしそうした信仰を残念ながらあの時は持てなかった、教会の自己保身に終始してしまった。**

**この手紙の**著者は、そうなりつつある教会に向かって、『打って出ろ』と命じているのです。すごいことだと思いませんか。今日の社会の中で、今日の体制の中で、今日の世界の中で、「教会が打って出なければならない**こと**とは、一体どういうことなのでしょう**？」と考えてみる必要があると思うのです。しかも、聖書のここの小見出しは「神に喜ばれる奉仕」なのですから。**

**「神に喜ばれる奉仕とは、打って出ることです」**と、このところではっきりそう言っているのです。私たちにとっては、「奉仕」なんて書くと、優しく親切な**輪を作って皆で共同作業をすること、心温まるような交わりを作ること、などと考え易いのですけれども、終わりの日に向かって歩んで**いる教会は、そんな甘っちょろいことでは駄目だと言うのです。278

救いはキリストにしかないのだということを、隣人にどうしても語っておかなければ、終わりの日に彼らは滅びるのだ。「仲良くしよう、皆で助け合おう、貧しい人々を支えよう」勿論それもいいけれど、そんなことで「終わりの日に、**彼らは**救われますか？」と問われているのです。そういう意味では、「終末」をどのように考えているのかが問われているのではないかと思います。さて、それではもう少し先に行きましょう。

第⑭節
**わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです。**

**私たちがこの地上に生きているのは、あくまで寄留しているに過ぎないのです。ここは、あなたがたが徹底して生き残れる場所ではない、そういう居場所ではないのです。終わりの時、神の裁きを通って、やがて神の御許に生きる、それがあなたがたの究極的な居場所**

**なのです。だからその時に向けて一生懸命頑張ってゆきましょう。神によって招かれるところは今は見えないけれども、御言を信じて歩み続けてゆきましょう、かのアブラハムのように・・。**

そういう意味で「来るべき都を探し求めている、ということの自己表現をどうやってこの地上で**実現して**いったらよいかが、次の⑮節、⑯節以下に書かれています。279

第⑮節、⑯節、
**だから、イエスを通して讃美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、**
**絶えず神に献げましょう。善い行いと施しとを忘れないでください。**
**このようないけにえこそ、神はお喜びになるのです。**

「絶えず神を讃美し続けましょう、神に対する信仰を告白し続けましょう、感謝に溢れた生活を歩んで行きましょう」それが神に献げる「いけにえ」なのです。もう一つは⑯節にある「善い行いと施しとを忘れないでください」という進言です。**ですから**「このようないけにえ」と**いうのは二通り**ありますね。讃美のいけにえと、施しのいけにえ**で**、その「いけにえ」を神に献げる時に、神はお喜びになるのです。

詩篇の詩人が、「神に喜ばれるのは砕**かれ**た魂です」と言っている「砕**かれ**た魂」というのは、「本当に悔い頽（くずお）れた魂」と訳すことができると思います。**この**「悔い頽れる」ということは、**こ**の手紙によると「神をどんな時にも讃美し、信仰をいかなる状況の中でも告白し続けること、そういう生き方をしながら、その結果として憐れむべきを憐れみ、**為すべき**施しをし続けること」なのです。

いと小さい者のひとりにしっかりと目を注いで、為すべきことをなし続ける、そのこと無しには、神に喜ばれる道を持っていないのです。いと小さい者のひとりにすることは、言葉としてはすごく簡単そうなのですが「いと小さい」ということは「**世間には見えない」ということです。世間には**見えない**（埋もれている）**者のために仕える、これは本当に神によって指示して頂かなければできないことです。本当に神が私たちに何を**為さしめようとしておられるかを、尋ね求めつつ生活をしてゆくという覚悟と気構えを持たない限り、いと小さい者のひとりに為す**ことは何一つできないだろうと思います。280

**世間**の目から見て「小さい」ということは「価値が軽い」ことであって、いと小さいと聖書で言っている意味では決してありません。あなたがたが心にかけることさえ忘れている人、あるいは限定された地域社会の中で生活している私たちにとっては、見えない世界はいっぱいあるのですが、そういう人々に対して神が私たちにさせようとしておられる業を、本当に心を注いで行なってゆけるのかどうか、祈り続けているかどうかが問われているのです。**こうした**御言を私たちが受け止め続けているかどうかは、目覚め続けているかどうかと深く関わっていくのではないでしょうか。

イエスはゲッセマネの園で祈られた時、弟子たちに「誘惑に陥らないように目を覚まして祈っていなさい」と言われ**ました。「誘惑」というのはあの場面でどう受け止めてよいか分かりませんが、現実に私たちにとっての「誘惑とは何か」というと、「もういい、これだけやったんだから、もう大**丈夫だという感覚」なのです。
**（誘惑と気づかないで陥っている誘惑、日常にあることを警告として受け止めたいです。）**

「いと小さい者にこれだけのことをした、これだけの慈善をした、これだけの奉仕をした、これだけの癒し**もしてやったのだから、もう十分、**もう大丈夫だ」これは「誘惑」ですね。命を捨てて救ってくださったイエスと一緒に生きると言っているのに、命を捨て**るどころか、中途半端のまま放り出して、**これだけでよいのだと言っているのですから。もう完全にイエスとは違う生き方をしているわけでしょ。自己義認なんですよ、「自分の居場所はここだ」と決めちゃうのですから。

**この手紙では「あなたがたの居場所はここではない**」というわけです。そのようにこの手紙を読んでみると、この手紙のもっているインパクトはすごいと思います。そういう聖書の御言葉を「大祭司イエス・キリスト」論でずっとまとめて来ているわけです。

「すべてのものの罪を自分の身に負って、神の御前に執り成しをしてくださった、あのキリスト御自身にすべてのことが結び付けられない限り、何一つ意味を持つことはないのです。何一つ起こり得ないのです、何一つ真実はないのです。だからその御方のところに出て行こうではないか。さっきの⑬節のみ言葉のように宿営を捨てて、出**で**ようではないか。
ゴルゴタの丘に向かって、あの**処刑の**十字架**が立つ**、あのイエスに**極みの**御苦しみを**与えた地**に向かって、歩んで行こうじゃないか。

**無**論、イエスの負われたあの十字架を同じように担うことはできない、とてもそれに耐える力はない。しかし、神は憐れみ深い御方であられるから、その十字架に向かって出て行く時には、あのクレネのシモンのように、強い**られ**てでもイエスの十字架を担わしめられて**主と**共に歩むことが許されるのだから、「先ず、出て行こうではないか』」ということをこの著者は、この手紙を受け取る人々に向かって訴えかけているの**で**す。282
**(ここは松山幸生先生のすごい迫力を感じます。先生の説教は時としてこのような火を吹くような説教であられました。)**

第⑰節
**指導者たちの言うことを聞き入れ、服従しなさい。**
**この人たちは、神に申し述べる者として、あなたがたの魂のために心を配っています。**
**彼らを嘆かせず、喜んでそうするようにさせなさい。**
**そうでないと、あなたがたに益となりません。**

⑲節のところまではもう一度初めに戻って、指導者たちと教会との関係をまとめた形で語っています。

「**指導者たちの言うことを聞き入れ、服従しなさい**」という、この辺のところが難しいところですね。もしも、指導者が間違ったことを言ったなら、一体どうなるのでしょう？

先ずここで私たちが考えなければならないのは、「指導者たちと呼ばれる人々はどういう資質を持っていなければならないか、神から与えられた資質をどのような形で生かして用いていなければいけないか」という問題です。

この箇所をずっと読んでまいりますと、**その指導者**が先ずしなければならないことは、「いつでも自分自身が牧会を求められている魂のために目を覚まして祈り続け、支え続ける、見守り続ける、そういう役割を担わしめられた者として生きてゆくこと」です。彼らは外から来る外敵に対して警戒すると同時に、教会の群れの魂が迷い出ないようにしっかりと見届けてゆく、そういう役割を持っているのです。

もう一つは、**指導者**は「神に申し述べる者として」と書いてありますね。もう少し別な言い方をすれば、「神の御前に弁明する者として立たされている者」である。
だから、そういう大事なことを担っている指導者に対して「あなたがたは、彼らの務めが全うされるように、完成されるように祈って支えてゆきなさい」ということをここでは訴えているわけです。**（祈祷会では必ず牧師のためにと、私たちは祈っています。）**

指導者が偉いからではなく、この指導者は神が選んだのだということのゆえに神の選びに応えてゆける者となれるように祈り、神の選びを畏れつつ、その選びに対して私たちは従ってゆく、という意味なのです。指導者が間違いのない人だから彼の言葉に従いなさい、とは言っていないのです。彼らがよしんば間違ったことを言ったとしても、だから彼ら**の価値がなくなるのではなく、彼らが指導者であるのは神が選ばれたゆえで、その神の御名のゆえに彼が本当に指導者として相応しく立ち続けてゆけるように祈っていこうではないか、という提言が**そこにはあるのです。

というのは同時に、その指導者も絶えず祈って欲しいことを皆に求め続ける、**願い**続ける。信徒の祈り、**執り成し**なしには教会の牧会はできないのですから。祈りによって支えられている指導者、そしてまた指導者によって神の御言を明確に受け止めることを許されている信徒たちの群れ、というものが相まって、「宿営の外に出て**も、健全な**伝道をすることができる教会になってゆけるのではないか」と私は思います。

第⑱節、
**わたしたちのために祈ってください。**
**わたしたちは、明らかな良心を持っていると確信しており、**
**すべてのことにおいて、立派にふるまいたいと思っています。**
ここからは、信徒たちが教会の牧師たちとの関係でどう関わっていったらいいか、その事柄を含めて、私たちのために祈ってくださいという牧師たちの言葉、**指導者たち**の言葉が書いてあります。

「どんなことに対しても落ち度のないような生き方、言い換えれば、神の御名が**穢**されないような生き方をしたいと願っています。しかし、私は弱い、不完全である、不十分である、だから、どうかこの神の選びに応えられるように祈ってください。」と信徒に向かって**願い出る**わけです。

「それを本当に祈ってゆける信徒とはどういう信徒か」というと、勿論、信仰をもって神の御言の前に絶えず目覚めている、御言によって生かされている人でなければならないでしょうし、或いは、神の御言に対して、どんな場合でも聞き従うことができる者であることが、明らかでなければならないと思います。
さっき言ったような意味から、「指導者に対して神が選んでくださったことのゆえに、畏れをもって関わっていく、そしてまた神が選んでくださったことのゆえに、信頼してゆく、そういうことを繰り返してゆくことが、初めてよい教会を育ててゆくことのために大事な問題になってゆくのだと思う」わけです。

お互いが助け合い、祈り合ってゆく群れであること、そして最後には本当に**ひとつ心になって神の群れを養い育て上げてゆく、神の救いをこの世に向かって証ししてゆく、それができるようになるのが大事なこと**です。

第⑲節
**特にお願いします。どうか、わたしがあなた方の所へ早く帰れるように、**
**祈ってください。**

著者が**「離れているあなたがたのことが心配で、このようなことを書いているけれども、顔と顔とを合わせて安心できるように、どうかあなたの許にゆかれるように祈ってください」と記しているこ**とは、彼は「今、あなたがたの許にゆくことができない事情があるほど、逼迫した状況の中にいる」ことになるわけです。

そういう状況の中で、彼は自分の**ために書いたのはここが初めてなんですね、「わたしのために祈ってください」と。けれども彼にとって心配なのは、私事ではなく、神が自分を選び、委ねてくださった群れのことであり、また、その群れによって救われなければならない多くの人々の魂のことなのです。そういう意味では、著者が、**自分の身の危険以上に、教会のことを考え、他の人々の救いを問題にしているという状況が、ここに見えて来ているわけです。

その意味で、私たちの生きざまが、（最初に言いましたように）自分に収斂してしまうような生き方ではなく、本当にキリスト・イエスの御言が生きて働き、命を持っているように「私がこの地上で選ばれ、生かされている恵みをどう生きていったらいいのかを、絶えず主の御霊に導かれながら問いつつ歩んでゆくことが、即ち、神の御心に適った『奉仕の生活』の意味ではな**か**ろうか」と思います。

（1998年7月11日）

写者あとがき
「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを思い出しなさい。」と呼びかけられました。「かつて書かれた事柄は、すべて私たちを教え導くものです。」とパウロの言葉を思いました。松山先生は具体的に「彼らの生涯を通して歩んで来た過程で、神に示され、与えられた多くの感化を、今一度、思い返してご覧なさい」と言われます。自分自身を振り返っても多すぎる恵みを受け賜っていることを覚えます。御言葉に生きる幸を最後まで歌い続けたいと思います。又、どんな状況になってもイエス・キリストを主と崇める覚悟の大切さを繰り返し教えられています。牧者の使命、信徒のつとめも今を生きる私たちに訴えられておられます。身の引き締まる思いです。良い牧者に恵まれることもまた恩寵です。今回も森容子先生のご推敲に助けられました。そしてパウロの恵み関連説教をお願いしました。ユーモアを交え、ご自分の体験から具体的に、かつ深く掘り下げられた内容になっています。真に恵み豊かな学びが続いておりますこと感謝でございます。2023/12/08

# 「神に仕える者の恵みの果実」IIコリント書６：①～⑬

日本基督教団峡南教会　　牧師　森　容子

①～②
わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。なぜなら、「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

「恵み；カリス」には、恩恵、贈り物、感謝、祝福、尊敬、好意という意味があります。単語の意味がこのように羅列されると、理解が深まることが多々ありますが、この場合は、何となく意味の的が絞りにくくなるような気が致します。
それでは、ここでパウロが言う「神からいただいた恵み」とは、一言で言うと、どういうことでしょうか？ヒントは、礼拝最後の祝祷の冒頭、「主イエス・キリストの恵み」にあります。

私が都内の教会で神学生実習をしていた頃、教会学校では中高科を担当したのですが、その中に、数学オリンピックに出場するような中３生がいて、「洗礼をお受けなさいね。あなたのご家族も祈り続けておられますよ。」と、熱心に勧めました。
すると、彼がこう言うのです。「でも僕には、分からなくて、わだかまっていることが一つあります。祝祷の際、なぜ、主イエス・キリストの愛、ではなくて、主イエス・キリストの恵みなのか、ということです。」

私は、ふと心に浮かんだままに「恵みという漢字をよく見てご覧なさい。『十字架を思う』とあるでしょ。2000年も前のイエス・キリストという御方の十字架の刑罰を、ああ、僕の贖罪のためにと思えることこそ、恵みなのよ。」と答えると彼は「分かりました！」と言い、それから一路、受洗準備へ向かって行きました。

「今や、恵みの時、今こそ、救いの日。」という言葉は、原典直訳では「見よ、今は最も恵まれた時。見よ、今は救いの日です。」となります。新共同訳では訳されていない「見よ」という２回の言葉は、世の中を眺め廻せ、ということではなく、真っ直ぐに神のみを仰ぎ見よ、という意味です。

これは、主からの大いなる恵みと祝福の言葉ですが、これを裏返せば、「今、この最上の時を逃せば、明日という日はない。」という警告の響きにも聞こえてまいりましょう。
「時をよく用いなさい」とは、この教会入り口の石碑に刻まれている、大切な御言です。

また、これは、イザヤ書49：⑧からの引用でもあります。素晴らしい御言です
ので、⑧－⑬節を共に唱和致しましょう。
「主はこう言われる。わたしは恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。
わたしはあなたを形づくり、あなたを立てて、民の契約とし、国を再興して、荒廃した嗣業の地を継がせる。捕らわれ人には、出でよと、闇に住む者には身を現せ、と命じる。
彼らは家畜を飼いつつ道を行き、荒れ地はすべて牧草地となる。彼らは飢えることなく、渇くこともない。太陽も熱風も彼らを打つことはない。憐れみ深い方が彼らを導き、湧き出る水のほとりに彼らを伴って行かれる。
わたしはすべての山に道をひらき、広い道を高く通す。見よ、遠くから来る、見よ、人々が北から、西から、また、シニムの地から来る。天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。山々よ、歓声をあげよ。主は御自分の民を慰め、その貧しい人々を憐れんでくださった。

③－④a
わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。

ここに、神への大切な「奉仕の務めが非難されないように」との願いが示されています。それは、自分たちの奉仕が阻害されたり、虚しくなったりしないためではなく、それよりも、非難する側の人々が、それによって罪を冒すこととなり、神様から処罰を受けることにならないようにとの、深い配慮によるものなのです。
それには、「どんな事にも」とか「あらゆる場合に」という類の言葉が２つ置かれています。また「神に仕える者としてその実を示す」という言葉があります。
これらの言葉の意味が、次の段にあります。

④b－⑦a
大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力によってそうしています。
「どんな事にも、あらゆる場合に」という具体的提示が、④ｂ節の「苦難、欠乏、行き詰まり、鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓」という極限の様態でしょう。その際に、いや、そんな極限の際だからこそ、「神に仕える者としての実」が豊かに実るのです。

それは「純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、真理の言葉、神の力」
によって裏打ちされた「大いなる忍耐」という果実です。

そして、忍耐に関するロマ書5：④の聖句「忍耐は練達を、練達は希望を生む・・」
は、最新の聖書協会共同訳では、「忍耐は品格を、品格は希望を生む・・」となっています。品格とは、練られた品性と気高い徳、深い愛の心をまとう方が放たれる高貴な香しさですね。

余談ですが、私は小２の時、父の転勤で名古屋に越し、そこで盛んであった習字を習いました。塾の先生は、私を名前でなく「東京の子」と、妹は「東京の子の妹」と呼ばれました。習字を習ったのは名古屋での2年半だけでしたが、中三の時、区内の書道展で特選に選ばれ、その時の課題が「華を去り実につく」でした。
これから先、華ある人生を大いに咲かせたいと願っている中３生には、いささか渋茶のような課題でした。が、この言葉「華を去り実につく」は、キリスト者となった私の心に深く浸みてきました。いっときの華（豪華・華麗）を追い求めることから脱皮し、その実（誠実・真実）を追い求める真の豊かさを共に味わう域に入れ、ということでしょう。
私がお習字に取り組んだのは中３まででしたが、「東京の子の妹」だった妹は、小学校教師の傍らお習字を続け、今や毎週、教会の礼拝看板を書き続けています。

⑦b－⑧a
左右の手に義の武器を持ち、栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。

パウロたちが左右の手に常時携えている「義の武器」のことは、この先10：③－⑥にこうあります。「わたしたちは肉において歩んでいますが、肉に従って戦うのではありません。わたしたちの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力であって要塞も破壊するに足ります。わたしたちは理屈を打ち破り、神の知識に逆らうあらゆる高慢を打ち倒し、あらゆる思惑をとりこにしてキリストに従わせ、また、あなたがたの従順が完全なものになるとき、すべての不従順を罰する用意ができています。」と。
これはもはや、人との戦いではなく、世の王を自認しているサタンとの壮絶な戦いですね。
⑧b－⑩
わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはおらず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

パウロは自分たちを、①節では「神の協力者（神と共に働く者）」と紹介し、④節では「神に仕える者（神の僕）」と紹介しています。いずれも、和解の福音を託された者として相応しい端的な紹介です。

しかしながら、この⑧a－⑩節ほど、キリストの使徒として懸命に生きているパウロたちの自己紹介として相応しい、胸打つ聖句はありません。そして、ここに掲げられた聖句が、古今東西のどれほどのクリスチャンを励まし続けてきたことか、計り知れません。私もかつて、この聖句に大いに励まされ、感涙を流し、その時の困難な状況から、立ち上がる力を頂いたひとりでありました。

サタンに唆されたこの世の者たちが、自分たちをどのように扱い、蔑もうとも、自分たちは誠実、真実である。自分たちは神様によく知られている。自分たちは主に在って生き生きと活動している。自分たちは主の御手による以外に死ぬことはありえない。自分たちは常に喜び感謝していてよい。自分たちは多くの人々の心を富ませている。従って、この世で自分のものと言えるものは何もないが、霊においては必要十分なすべてのものを、主からお受けし託されている。心からアーメンです。

⑪－⑬
コリントの人たち、わたしたちはあなたがたに率直に語り、心を広く開きました。わたしたちはあなたがたを広い心で受け入れていますが、あなたがたは自分で心を狭くしています。子供たちに語るようにわたしは言いますが、あなたがたも同じように心を広くしてください。

この御言は、私を含め、今、この教会の礼拝堂に座しておられるすべての方々に向け、パウロを代弁者として主が語りかけておられる御言です。「あなたがたは自分で心を狭くしています。」と。この御言を、私たちは真摯にお聴きし、受け留めてゆかねばなりません。
それでは、心を広くする、狭くなっている心を広げるには、どうしたらよいのでしょうか。それには、自分が今や構築してしまっている価値観や常識、自分なりの規範や自分独自の信仰形態を、揺るぎなく正しいもの、唯一無二のものと固く握り固持し続けていては、相手に対するストライクゾーンを広げられません。

それには、主の深く広やかな御愛を仰いで、相手の立場にも立ち、前向きに受け入れる備えを為した上で、聖書の御言やお祈りの内に示される主の御心に、素直な心でお従いしてゆくことでありましょう。でも、そうは言っても、これは努力ということだけではなかなか達成できることではありませんから、そうありたいと祈り願い続けることにより、きっとご聖霊が豊かなお働きかけをくださることでしょう。そして、そうした主の香りを放つおひとりひとりの在す教会でありたいものです。

写者から感謝。
「見よ！、真っ直ぐに神のみを仰ぎ見よ！」と原典からの訳を教えて頂きました。森容子先生の説教の特徴はキーワードや邦訳にあやふやなところは原点で説き明かししてくださいます。そこから深耕が始まり、広がっていくという特徴があります。松山幸生先生とのハーモニーが真摯さを増してきます。感謝。